古代服装研究（第7報）

——かぶりものの変遷(3)——

岡　綾子・野津哲子
（被服構成学研究室）

A Study of Ancient Costome (Part 7)
The Historical Changes of Headgears (3)

Ayako OKA・Tetsuko NOTSU

Ⅰ　緒　言

かぶりものは、人間の生活に即して生まれたものであり、ある時期、ある地域にある民族の間に定着し、気候・風土・習慣にはぐくまれた生活感情が刻まれ民族の生活史の一つの主要部分をしめるとも考えられている。

かぶりものの史的現象をふりかえってみるとき、他の物的条件による歴史と同様、単純なものから複雑なものへと変化し、その成立や発展に雑多な契機が働いていると思われる。

そこでわが国のかぶりものを知る第一段階として、本報は烏帽子についての考察である。

現存する文献類・絵巻物・埴輪などを中心として考察をすすめ検討した結果を報告する。

Ⅱ　かぶりもの

Ⅰ　烏帽子

1)古墳時代

魏志倭人伝の伝えているところによると、われわれの祖先が文化的な生活をするようになったのは西暦一世紀以後といわれ、一世紀ごろから農業もしだいに発達したといわれている。

一世紀から八世紀へかけての、日本人のかぶりもの（烏帽子）については日本の各地に四世紀から八世紀にわたって造られた天皇や豪族たちの古墳から発見される埴輪人物像などによって想像するほかに方法がない。(第1図、2図、3図参照)

三世紀まで日本は百いくつもの部落国家に分かれていたが、四世紀になると、国内は天皇によって支配され、政治の中心も北九州から近畿地方の大和にうつり、六世紀末には聖徳太子の努力により法治国の土台ができこの間に学者王仁(わに)をはじめ、朝鮮、中国から帰化するものが多く、文化は進歩したのである。

2)飛鳥・奈良時代

天平年間（729～766）といえば、奈良時代で最も文化のさかえた時期で、文化のあらゆる面で唐のえいきょうをうけていた。

天武帝11年(683)新しく漆紗冠と圭冠(はしばこうぶり)とが制定され、後者が烏帽子の原流であったことは第6報で述べた通りである。したがって紙上の関係もあるのでくわしい説明は省略する。

3)平安時代

平安朝時代にはいると、いわゆる国風文化が、しだいに形成されてくる。つまり独自的な風俗も、あらわれる。いくつかの平安の未に描かれた絵巻物があって、当時の諸階層の生活文化を知ることができる。これらの絵巻物から、わたくしたちは二つの流れを当時の風俗の中に見出すことができると思われる。その第一は「伴大納言絵詞」「信貴山縁起絵巻」「年中行事絵巻」などに描かれた庶民の姿である。名もなき庶民たちは、農作物をつくり、魚をとり、衣服をつくり、家を建てるといった社会の中で直接生産をする縁の下の力持ちとして、大きな力をたくわえていったのである。おどりなどにみられる彼らのユーモアたっぷりな姿態に、庶民のそうした力の躍動を見るのは興味あることではなかろうか。

第二は、「源氏物語絵巻」などにみられる貴族の文化である。彼らの文化、風俗は二つの時代に著しく日本独特の特長をつよくあらわしてきた。

政治体制が摂関制・院政とすすむにつれて、律令体制

は崩壊し、封建的な政治制度をその体内につくりあげてくる。武士団の発生は、すでにこの時代の後期には、明瞭な姿をあらわし、国風化した貴族文化をこわして、封建時代の風俗をつくりだしてくるが、その大きな変り目は、源平急乱の時代においてであった。この時代には、文献による風俗資料が豊富になったのである。

平安時代の貴族の支配は、その末期に急速に武士階級にとってかわられた。将門の乱からはじまり、前九年、後三年の役をつうじて、東国に勢をのばしてきた源氏一門と、西海に力をたくわえて保元、平治の合戦でたちまち貴族勢力や源氏をうちたおし、京都に覇権をうちたてた平氏一門との、波乱にみちた興亡がくりひろげられたのである。このことは平家物語に美しい叙事詩としてえがかれ、広く愛読されている。

源平争乱を頂点として、平安貴族の生活は頽廃していった。平家物語はここでもこの時代の興りつくる武士と、亡びゆく貴族層、活気をおびた商人や都市民などの一般庶民の姿をもっとも精細に記述している。

わたくしたちは、これらの文献を手がかりに源平時代の風俗や生活のありさまをかなりはっきり知ることができる。

保元、平治の乱によってはっきり自己を確立した武士階級は、すぐには貴族文化にかわる新しい文化創造者としてはあらわれなかった。

しかし武具、衣服、住居、習慣など生活全体の上では、行動的な新鮮なものを自からつぎつぎとつくりだしていったのである。

平安時代の文献に烏帽子に関することが記載されているのでおもなものについて次に記す。

大和物語[1]に「さてこの男は、呉竹のよなきをきりて、狩衣・袴・烏帽子・帯とをいれて、弓・やなぐい・太刀（たち）などいわれてぞ埋みける」。

今昔物語集四[2]に「髪モ髻ニ被取ル許ニ生ヌレバ、引結上テ、烏帽子シタル形チ、糸清気也」「黒ク装ゾキタル男ノ烏帽子ヲ引垂レテ、夕暮方ナレバ顔ハタシカニ不見ヘシテ、僧正ノ前ニ出来テ突居タリ」「然テ、内供、夢ニ、房ノ上ニ金色ノ佛、烏帽子ヲ為給テ、風ノ吹ケバ紙捻ヲ以テ烏帽子ヲオトガイニ結付テ、ヒハダヲ葺給フト見ル程ニ、急ト驚ヌ」「何事ノ可有ニカト見廻スニ、年七八十許ナル翁ノ黒キ髪モ无クテ、白シトテモ所々有ル頭ニ、袋ノ様ナル烏帽子ヲ押入レテ、本ヨリモ小カリケル男ノ、弥ヨコシカガマリヲレバ杖ニ懸りテ歩ビ来ル、有り」。

今昔物語集五[3]に「何者ゾト見遣テ見レバ、烏帽子折テ結タル男共ノ、白キ水干、袴着タル、百餅人許出来タリ」。「烏帽子モセヌ者ノ、落ソント云フ舞ノ様ニテ有レバ、アキマシク怖シク思ヒテ、此ハ畫盗人ノ入ニタルニコソ有ケレト思テ、枕上ナル大刀ヲ取ルマニ彼レハ何者ゾ」。「夜ル寝タリケルニ程ニ、烏帽子ヲ鼠ノ咋テ持行テ、散々ニ咋ヒ損タリケレバ、取替ノ烏帽子モ无クテ、烏帽子モ不為デ、宿直壺屋ニ袖ヲカツギテ、コモリキタリケレバ、主大納言此ヲ聞給ヒテ、糸惜キ事カナトテ、我が烏帽子ヲ此レ取セヨトテ給ハセタリケレバ、内藤、其ノ烏帽子ヲ給ハリテ、其レヲシテ、壺屋ヨリ出テ、異侍共ニ向テ云ケル様、主達ヨ。此レ見ヨ。寺冠・社冠ノ得テセムヤハ。一ノ大納言ノ御舊烏帽子ヲコソハ、給ハリテセメトテ」「烏帽子ト狩衣ト取テ遣セヨト云テ遣セタリケレバ、女房棹ニ懸タル□ヨカナル狩衣ヲ取テ、烏帽子ニ具シテ、袋ニ入レテ遣テケリ」「烏帽子ハ有り、狩衣ハ尤クテ、椎鈍ノ衣ヲ疊テ遣セタリ」「手ヲスリテ額ニ充テ、女ノムネノ許ニ烏帽子ヲ差充テ」「烏帽子超シニ此ノ女ヒタト取テ」。

枕草子[4]に「長烏帽子して、さすがに人に見えじとまどひ入るほどに、物につきさはりて、そよろといはせたる」。「烏帽子に物忌つけたるは、さるべき日なれど」「烏帽子のおし入れたるけしきも、しどけなく見ゆ」「烏帽子の緒、元結、かためずともありなんとこそおぼゆれ」「烏帽子の緒きとつよげに結ひ入れて」「こはからぬ烏帽子ふりやりつつ、さいみじく呪ふとも」。

源氏物語五[5]に「烏帽子・直衣の姿、いと、あらまほしく、きよげにて、歩み入り給ふより、恥づかしげに、用意ことなり」。

狭衣物語[6]に「烏帽子・直衣なる人の、ふとさし合ひたるに、出で所の便なければ、袖して顔をかくして」「烏帽子の額も少しあがり、びんぐきもしどけなげにて、またいとねぶたげなるまみ、色のあはひなど」。

栄華物語上[7]に「この姫君達のおはすれば、かたじけながりて、御烏帽子引き入れてふし給へり」。

栄華物語下[8]に「中将の君いみじう若うおかしげなる男の、烏帽子・直衣などが、物も覚えず泣き惑ふ様、あはれに悲しげに見え給ふ」。

保元物語[9]に「門近く打よせて、鈴鹿山の立烏帽子からめ取て帝王のげんざんに入たりし山田の庄司行秀が後いん」。

以上のことから察知できることは、平安時代には烏帽子は、貴族も庶民もみんな日中はいうまでもなく寝るときでさえかぶっていたものとみられる。

貴族の烏帽子は黒紗づくり、院政時代ごろからは漆（うるし）で塗り固め、立烏帽子ともいわれていたが、庶民の烏帽子は布づくりで形もいろいろであった。貴族の立烏帽子形の折れていないものもあれば、折烏帽子すなわち鎌倉時

代以後の侍烏帽子のようなものもすでにあったと思われるし、まるで風に吹かれて折れたような風折烏帽子もあった。あるいは細烏帽子や揉烏帽子のようなものもあり千差万別であったと考えられる。(第４図、第５図、第６図、第７図、第８図、第９図、第10図参照)

4)鎌倉時代

源頼朝が鎌倉に幕府をひらいたのは、1192年で武家の政権が確立され、これまでの古代天皇制の権力に対抗する新しい階級として、武士がいよいよ勢力をもつようになったのである。

この時代には、平安時代までのけんらんたる王朝文化に対し、簡素で雄渾な武家文化の時代になったといえる。しかし武士の政権をささえる経済的な基盤は農民であり、農民の生活の中に新しい進歩が見られることを見のがすことはできない。橋をかけ、道路工事をしすすんだ鋤鍬をつかい水車をまわして農耕にはげんでおり、この時代以前にはみられなかった生産力のたかまりが強くあらわれている。

またいろいろな職人、銅細工師、仏師、刀工、大工など、すぐれたものをどしどしつくるようになったのである。

この時代の武家文化の特色は、中国宋文化の影響であったと考えられる。武士と僧侶はこの文化の摂取者であり、禅宗文化は武士の質実な気分に適合して、独自な特色を発揮するようになったといえる。この傾向は次の時代にもひきつがれていったのである。

鎌倉幕府が亡びて、南北朝の動乱がはじまり、守護大名を統轄して動乱を収拾した足利氏の室町幕府ができた時期、そしてそれがふたたび戦国時代の動乱へと人々の生活が大きくゆすぶられたこの時代は、日本人の風俗を根本からゆりうごかしていった時代でもある。

武士の文化は公家風俗にならい、北山、東山に結集され、書院造などの建築様式、庭園造営、能の形成などにみるように日本風に洗練され、それがずっと後まで風俗の中にしみこんでいくのである。

年中行事も、節分、端午の節句、盆の行事、施餓鬼、中秋観月など、現在行われている原形がかたちづくられていった。

こうした民衆と武士という対立する文化は戦国の動乱をへて、さらに安士、桃山時代にいたって、新しい文化の端緒を示すようになっていくのである。

鎌倉時代の文献に烏帽子に関することが記載されているのでおもなものについて記す。

平家物語[10]上に「はじめはすいかんにたて烏帽子、白ざやまきをさいてまひければ」。「小松殿烏帽子直衣に」。「あたらしき烏帽子・淨衣きて」。「小倉山の嵐に烏帽子を河へ吹入られ」。「三衣箱(みえばこ)の中より烏帽子ひとつとり出されたりけるとかや」。

平家物語[11]下に「ひをぐくりの直垂に糸くずの袴立烏帽子で」。「装束烏帽子ぎはより指貫のすそまで」。「よろいに立烏帽子で軍(いくさ)の陣へ」。「藍摺の水干、立烏帽子でわたされけり」。「直垂に折烏帽子きたる男」。

義經記[12]に「烏帽子なりとも著(き)て下らばや」。「大宮司(ぐうじ)烏帽子奉り、取上げ、烏帽子をぞ召(め)されける」。「人の肩を押へて、烏帽子取りて引っこみ」。「揉烏帽子(もみはちまき)鉢巻し」。「烏帽子に四手(しで)を付けさせ」。「烏帽子に額結(ひたいゆ)ひて」。「折烏帽子に烏帽子懸(かけ)して」。「揉烏帽子(もみえぼし)に結頭して」。「烏帽子引立ておし揉(も)うで、盆のくぼに引き入れ、烏帽子懸(かけ)を以て」。「とくさ色の水干に、立烏帽子」。「山ばと色の水干、立烏帽子」。「折らぬ烏帽子十頭(かしら)、直垂、大口などを」。

徒然草[13]に「鞘巻(さうまき)を差させ、烏帽子をひき入れたり」。

以上のことから考えられることは、男のかぶりものとしては、前代と同じく烏帽子があった。鎌倉時代末期から南北朝にかけて、中でも折烏帽子のきわめて形式化した侍烏帽子がもっとも流行し、武士の間だけでなく農工商にたずさわる庶民の間にも広く用いられた。風折烏帽子の名が文献に見えるのも室町時代からである。烏帽子の頂部が左右いずれか一方に折伏したものである。漆を用いての烏帽子の硬化と形式化に対して、一方にはまた柔らかな烏帽子も行なわれていたのである。これを揉(もみ)烏帽子とか萎(なえ)烏帽子と呼んだのである。庶民の間にはこの方が多く用いられたようである。烏帽子の製作法が複雑化したので、職業的な烏帽子折・烏帽子師・烏帽子商人がうまれ、顧客の注文に応じて種々な折烏帽を製作することになったともいわれている。烏帽子は以上のように多様に発達したのである。(第11図、第12図、第13図、第14図、第15図、第16図参照)

5)室町時代

中世社会でいっそう簡略になった服装は、南北朝の内乱をへて、足利氏の政権ができた一四世紀の後半から、あらたな展開の準備段階にはいったといえる。

武士は、「烏帽子・直垂」というように直垂に烏帽子をつけることをもっとも重い正装としていた。この時代に侍烏帽子(さむらいえぼし)がうまれ、これは素襖をつける時に用いられたのである。侍烏帽子は、絹でつくられた立烏帽子を頂で三角に折り、しわをのばし、三角形の平面を正面からみて左右に二つつくり、これを黒のうるしでかためたものである。武士の烏帽子は、公卿や庶民に広まり、装飾的な傾向もうまれたのである。

室町時代の文献に烏帽子に関することが記載されてい

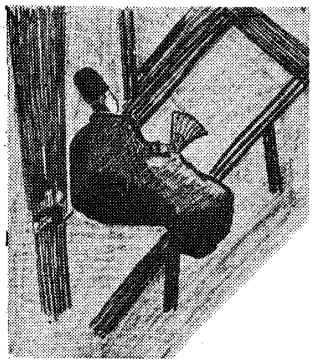
第１図
烏帽子のようなものをかぶった男
（埼玉県出土）

第２図
烏帽子のようなかぶとをかぶった男の頭部

第３図
烏帽子のごとく長い帽子の先端が前方にたれ下がっている
（茨城県出土）

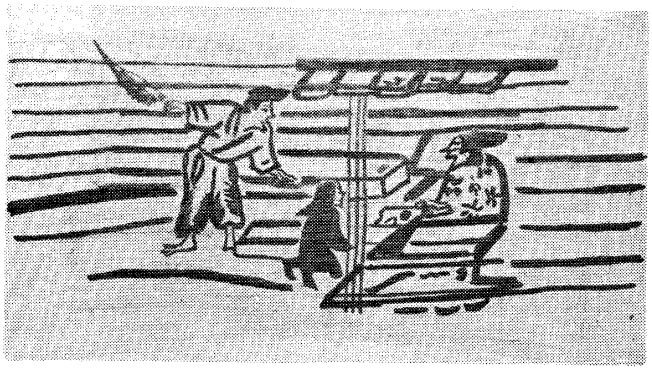
第４図
左から立烏帽子・綾い笠・折烏帽子、まん中は僧侶である
（伴大納言絵詞）

第５図　立烏帽子（鳥獣戯画）
一方は、みごとにつぶれている。男たちが好みに任せて烏帽子の形をつくり出し形もさまざまである。



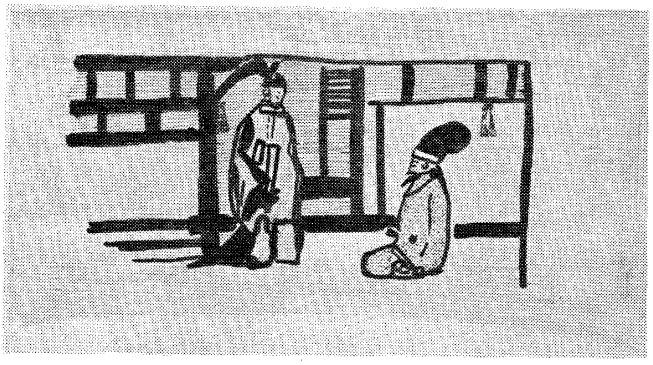
第６図
平安末期にえがかれた〈源氏物語絵巻〉に出てくる直衣姿の男立烏帽子をかぶり手にかわほり扇をもっている）

第７図
袴は指貫、頭には烏帽子、手にはかわほり扇か中啓を持つ。



第８図
大工・国宝・石山寺縁起（石山寺蔵）

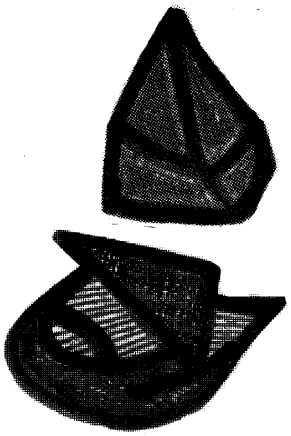
第９図
立烏帽子をかぶり狩衣を着ている貴族



第10図
旅姿の老人
からむしのたれぎぬをつけた笠をかぶり脚胖をつけた老婆と折烏帽子をかぶった老人。

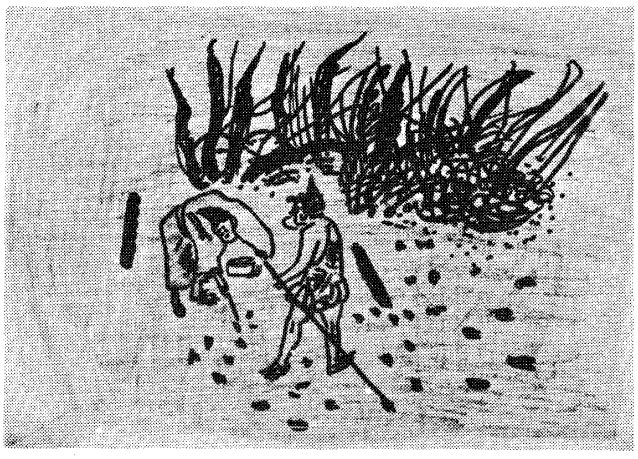
第11図　公卿と武士
身分のちがいは服装にもよくあらわれていて、武士は直垂を着て萎烏帽子姿である。

第12図
武士は侍烏帽子に直垂を着ている。

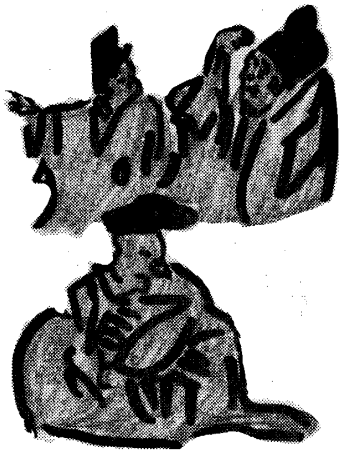


第13図
侍烏帽子（さむらいえぼし）　春日権現霊験記（かすがごんげんれいげんき）

第14図　春日権現霊験記



第15図　春日権現霊験記



第16図
侍烏帽子（上左）、立烏帽子（上右）、風折烏帽子（下）など年令身分などに応じて形はそれぞれ変化している。
（上　直幹申文絵詞、下　福富草紙）

第17図　酔った武士　酒飯論絵詞

るのでおもなものについて次に記す。

神皇正統記[14]に「日御烏帽子直衣ニフカ沓（ぐつ）」。「烏帽子ノヒタイナンド」。

曾我物語[15]に「烏帽子をきせて、曾我五郎時政」。「烏帽子の權守（ごんのかみ）がもとをこしらへて」。「祐成（すけなり）もいでんとて、烏帽子の簡おしたて」。「五郎は、烏帽子の座敷、矢のおひ様」。「風折したる立烏帽子、御狩衣は柳色」。「一寸斑（すんまだら）の烏帽子懸をつよくかけ」。「平紋の烏帽子懸をつよくかけ」。

太平記一[16]に「折烏帽子に直垂を著し」。

太平記二[17]に「細烏帽子ニ上下（かみしも）」。「烏帽子ニ花田（はなた）ノウチ絹ヲ重テ」。「次に細烏帽子ニ袖単白シテ」。「次に細烏帽子ニ香ノ水干著タル舎人」。

太平記三[18]に「昨日マデ烏帽子ノ折様、衣絞ノタメ様ヲマネテ」。

増鏡[19]に「なへばめる烏帽子直衣にてさぶらひ給けるぞ」。「大臣（おとど）烏帽子直衣のなよら」。「本院は御烏帽子直衣・青鈍（あをにび）の御指貫（さしぬき）」。「両院御烏帽子直衣」。「烏帽子直衣袴きはにて参り給ふ」。「折烏帽子に布直垂という物うち着て」。

紙上の関係で引用文が少なく理解できにくい点が多々あるが以上を考察すると、この時代に侍烏帽子がうまれたということである。

しかし、何といっても防げないのは露頂の流行であった。かぶりものをとって頭を出すことがおこったのである。この時代には武士の間にも広まり、肩衣をつけた武士などは露頂のものが多い。

とくに、応仁の乱では、この傾向が強くなっていったと考えられる。庶民が仕事の必要からとくに馬借（ばしゃく）などが頭巾をかぶったり、女子が桂巻（かつらまき）をしたりして、働くとき塵埃をかぶるのを防いだというようなことは武士にはなく、かえって、露出した頭髪をかざるための男まげの方向へすすんでゆくのである。

武士たちが外出に編笠や菅笠をかぶるようになったのもこの頃で、とくに浪人たちは、戦国乱世の中をこうした姿で歩きまわっていたといえる。(第17図参照)

Ⅲ　ま　と　め

1)古代には、頭を露出することは恥とされ、一般の男子は必ずかぶりものをつけていた。「伴大納言絵詞」に清和天皇がかぶりものをつけない「露頂姿」でいるのが唯一の例外といってよいくらいである。

2)平安時代には、貴族も、庶民も大抵いつでも烏帽子をかぶっていたが、鎌倉時代に入ると、平常はかぶりものを着けない風習も起こってきたのである。

3)室町時代には男性は侍烏帽子がもっとも多く一般的となっていったが、頭髪に月代（さかやき）がひろがり、なにもかぶらない露頭の風習も多くなったのである。

引用文献

(1)阪倉篤義校注：大和物語、岩波書店、315（1966）
(2)山田孝雄校注：今昔物語四、岩波書店、90～433（1965）
(3)山田孝雄校注：今昔物語五、岩波書店、52～268（1965）
(4)池田亀鑑校注：枕草子、岩波書店、70～204（1967）
(5)山岸徳平校注：源氏物語五、岩波書店、230（1966）
(6)三谷栄一校注：狭衣物語、岩波書店、257～404（1967）
(7)松村博司校注：栄華物語上、岩波書店、292（1964）
(8)松村博司校注：栄華物語下、岩波書店、38(1967)
(9)永積安明校注：保元物語、岩波書店、103（1966）
(10)高木市之助校注：平家物語上、岩波書店、95～421（1966）
(11)高木市之助校注：平家物語下、岩波書店、132～373（1966）
(12)岡見正雄校注：義經記、岩波書店、64～303（1966）
(13)西尾實校注：徒然草、岩波書店、271（1967）
(14)岩佐正校注：神皇正統記、岩波書店、144（1966）
(15)市古貞次校注：曽我物語、岩波書店、208～342(1966)
(16)後藤丹治：大平記一、朝日新聞社、120（1961）
(17)後藤丹治校注：大平記二、岩波書店、18(1966)
(18)後藤丹治校注：大平記三、岩波書店、149（1966）
(19)岩佐正校注：増鏡、岩波書店、294～483（1966）
(20)日本風俗史研究会編：日本生活変遷史衣食住、島根新聞社（1960）
(21)林屋辰三郎：日本歴史と文化上巻、平凡社（1966）
(22)田中一松他監修：原始・飛鳥時代、筑摩書房（1971）
(23)田中一松他監修：奈良時代、筑摩書房（1971）
(24)田中一松他監修：平安時代上・下、筑摩書房（1971）
(25)田中一松他監修：鎌倉時代、筑摩書房（1972）
(26)田中一松他監修：室町時代、筑摩書房（1972）

（昭和49年1月4日受理）